

平成28年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成28年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ウルメイワシ

学名 *Etrumeus teres*

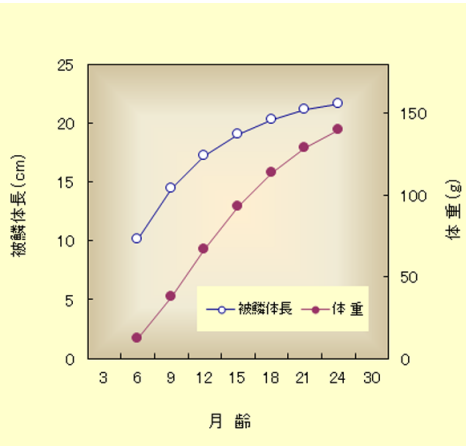
系群名 太平洋系群

担当水研 中央水産研究所



生物学的特性

寿命： 2歳前後
成熟開始年齢： 9カ月（30%）、12カ月（100%）
産卵期・産卵場： 前年10～7月（盛期は3～6月）、産卵期前半は土佐湾周辺海域中心、産卵期後半は伊豆諸島～関東近海にも広がる
食性： 動物プランクトン等
捕食者： 中大型浮魚等

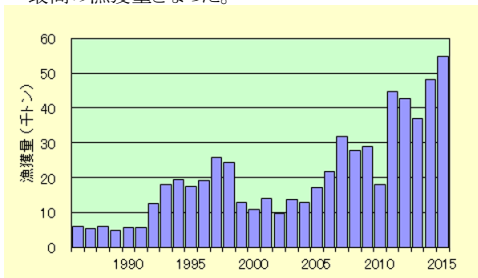


漁業の特徴

主にまき網、定置網により漁獲される。和歌山県では棒受網、高知県では多鈎釣りでも漁獲される。仔稚魚(シラス)期は船びき網で漁獲される。漁獲の大部分は0～1歳である。外国船による漁獲はない。

漁獲の動向

漁獲量の大部分を占める宮崎県～三重県の漁獲量は、1985～1991年は5,000～6,000トン台であったが、1992～1998年に増加し、2.5万吨前後となった。1999～2004年は1.0～1.4万吨まで減少したが、2005年以降再び増加傾向となった。2010年は2.0万吨以下となったが、2011年以降4.0万吨を超える年が増え、2015年は5.5万吨と過去最高の漁獲量となった。



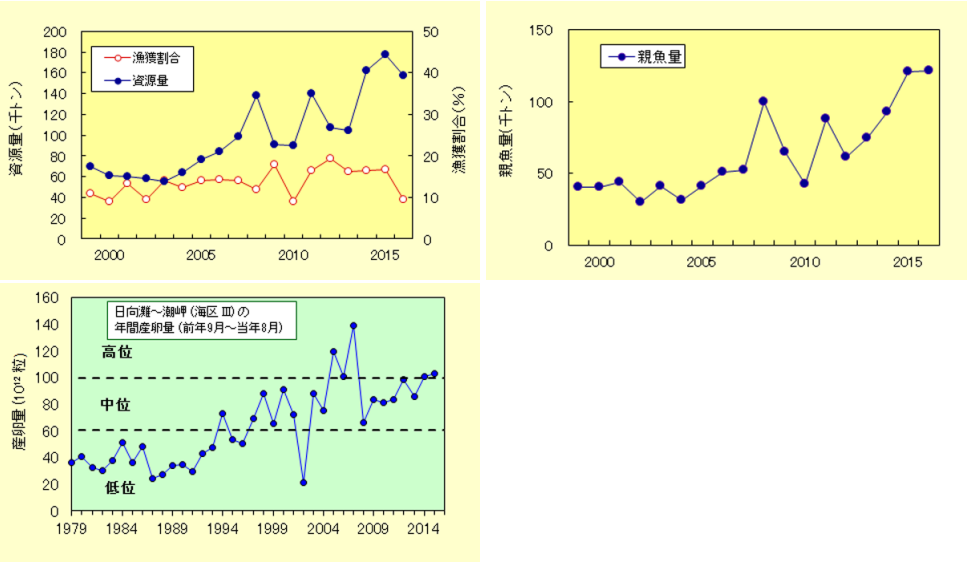
資源評価法

宮崎県～三重県を対象とし、1999～2016年の年齢別・年別(半年別)漁獲尾数等に基づくコホート解析により資源量を推定した。半期(1～6月、7～12月)単位で寿命24月齢までの4期とし、0～5月齢(0歳)を1期、6～11月齢(0歳)を2期、12～17月齢(1歳)を3期、18～23月齢(1歳)を4期として、半年単位のコホート解析により年齢別資源尾数、資源量、漁獲係数を推定した。1979～2015年の産卵調査の結果から算出した産卵量(前年9月～8月の月別産卵量の合計)を資源量指標値として資源の水準を判断した。

資源状態

コホート解析により推定した1999～2016年の資源量および親魚量は、概して増加傾向にあり、2016年の資源量は15.8万吨、親魚量は12.1万吨であった。1979～2015年の日向灘～潮岬(海区III、コホート解析対象海域に相当)における年間産卵量の最大値と最小値の間を三等分し、高位、中位、低位の水準を定義すると、2015年の産卵量(103兆粒)は、高位と中位の境界値(99兆粒)を上回ったため、資源水準は高位と判断した。コホート解析により推定した直近5年間(2012～2016年)の資源量の推移から、動向は増加と判断した。





管理方策

産卵量は長期的に増加傾向にあり、最近年の多い漁獲量の下でも中位～高位水準を保っている。さらに、資源量、親魚量も概して増加傾向にある。これは、再生産が順調に行われていることを示唆しており、最近年の漁獲は資源状態に悪影響を及ぼしていないと考えられることから、現状の漁獲圧を維持することを目標にFcurrentを管理基準として2017年ABCを算出した。再生産の場となる沿岸の産卵場を維持し、かつ、再生産状況をモニタリングすることが重要である。

管理基準	Target/Limit	F 値	漁獲割合 (%)	2017年ABC (千トン)	Blimit=
					親魚量5年後 (千トン)
Fcurrent	Target	0.20	14	29	96
	Limit	0.25	16	34	62

- ABC算定規則1-3)-(1)を用いた
- Limitは、管理基準の下で許容される最大レベルの漁獲係数(F値)による漁獲量である。Targetは、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、より安定的な資源の増大または維持が期待されるF値による漁獲量。Ftarget = α Flimitとし、係数αには標準値0.8を用いた
- 2016年の親魚量は12.1万トン(親魚量は3期*の資源量)
- Fcurrentは2013～2015年の1～4期*のFの平均値
- 漁獲割合は2017年の1期*および3期*の漁獲量／資源量と2期*および4期*の漁獲量／資源量の平均値
- F値は1～4期*の平均値

*コホート解析では、半期(1～6月、7～12月)単位で寿命24月齢までの4期とし、0～5月齢(0歳)を1期、6～11月齢(0歳)を2期、12～17月齢(1歳)を3期、18～23月齢(1歳)を4期とした

資源評価のまとめ

- 資源水準は高位、動向は増加
- 資源量、親魚量、産卵量は、いずれも長期的には増加傾向
- 2016年の資源量は15.8万トン、親魚量は12.1万トン

管理方策のまとめ

- 現状の漁獲圧を維持することを目標にFcurrentを管理基準としてABCを算出した
- 再生産は順調に行われており、最近年の多い漁獲の下でも、漁獲は資源状態に悪影響を及ぼしていないと考えられる
- 再生産の場となる沿岸の産卵場を維持し、かつ、再生産状況をモニタリングすることが重要である

執筆者: 高須賀明典・亘 真吾・入路光雄・梨田一也

資源評価は毎年更新されます。